

平塚柔道物語 6 1

暴力による教育は成り立たない

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

現在、柔道界も指導者の暴力が社会問題となっているが、暴力による教育は成り立たないと思う。

なぜならば、私も小学校の時、教師に暴力を振るわれた経験があり、社会人になってからも、ずっとその教師を許せないと思っていたからである。

私が小学校6年生の時、その日は私の担任の先生が出張になり「体育でもよし、羽根つきでもよし、自習時間にせよ」と言われていた。その日は風が強かったので、講堂で羽根つきを始めた。後から、同学年担当のI教師が、自分のクラスの生徒を引き連れて入って来た。私たちに「音楽の授業をここでやるから出る」と言った。「私達が先に使ったのです」とある生徒が意見を言ったことが、I教師の怒りにふれた。「学級委員は誰だ。前に出る」と言う。当時、学級委員であった私は前に出て、担任の教師の話したのであるが、先生自身のメンツなのか、私の頭にゲンコツで力いっぱい殴ったのであった。けっこう痛かった。コブができたほどである。私は12歳、教師は25歳位であった。話せばわかるのに、感情的に力いっぱいのゲンコツ。私は許せなかった。外に出て、羽根つきをしたが、クラスの仲間たちからは大いに同情された。その後、私は校長室に乗り込み、事情を報告。ゲンコツは許せないことを主張した。I教師は校長から注意されたと思う。しかし、私の所へ謝りに来ることはなかった。その後、学年の同窓会の話があると「あの先生は呼ぶな」という程、私は許せなかったのである。それから35年の歳月が経ったある日、その先生とばったり会うことになる。

ある幼稚園の祝賀会が地元のホテルで行われた。来賓で私は招待されていた。当時、私は平塚市議会議員で教育民生常任委員長という教育界においても強い立場にあった。私が席に着いて、隣の席を見ると、何とI校長の名前が席に書かれてあった。一瞬いやだなと思った。席をいまさら代わることもできない。じたばたしてもしょうがないと私自身腹を決めた。それならば、I校長が私にどういふ対応をするのか、見

てみようと思心に決めて待っていたのである。そしてI校長が見える。私がとなりの席であることに、I校長は一瞬ドギョとしたのであろう。とまどったようにも見えた。その後思わぬことが起こった。私の前に立って「奥山先生ですか」と言う。「Iでございます。あの節は若気の至りで大変に失礼を致しました」と深々と頭を下げたのであった。I校長も忘れていなかったのである。その時、今まで許せなかった私の心がスーッと消えて行ったのである。私が議員であったことにより、そのような態度をしたのかという一点もあったが、年下の私に対して「先生」という敬語を使って深々と頭を下げたことは、私も考えていなかった。なかなか出来ないことと思った。それを実践したI教師は、教員生活の中で様々な経験を通して成長されたのではないかと思った。その後、I校長の学校を訪問。校長は教職員の皆に「昔の生徒だった奥山議員からケーキを頂いたよ」と、うれしそうに、皆に声をかけた。

以上が私の体験談であるが、私のように解決したケースは、まれであり特殊な例である。指導者や教師という立場で感情的に暴力をふるう。または教育という名のもとに無抵抗である生徒を暴力的に指導することが問題なのである。生徒は指導されたという内容を忘れ、暴力を受けたということだけが生涯の記憶に残り、恨みになるのではあるまいか。私のようにゲンコツ1つでも許せなかった位だから・・・よって暴力による指導はあり得ない。言い換えれば、暴力による教育は成り立たないのである。それならば、どうすべきか。指導者は常に人を思いやる人格・器量を磨き、心をつかむ言葉による指導力を養うべきではないかと思う。



最前列の右側が
小学校6年生の筆者